

能動的・協働的な学びを支える学校図書館

— 児童の読書活動活性化を目指した委員会活動の実践 —

前橋市立広瀬小学校 青木 里美

1 主題設定の理由

本校は、児童の体力低下を受けて一定の運動量確保をするため、休み時間の外遊びを推奨している。しかしその一方で、図書館利用時間が減少傾向にある。特に高学年では、当番活動や鼓笛練習などの活動で休み時間に図書館を利用する時間の確保がさらに厳しい状態である。また、朝読書の時間などの決まった読書活動の定着がなされていないことにも課題があると考え。そこで本校では、学校図書館の環境の整備や読書への取り組み方の改善を通して読書に親しむきっかけを作るとともに、たくさんの本に触れることで興味・関心をもって読書の習慣を身に付ける読書活動を目指したいと思いサブテーマを設定した。

2 研究の概要

(1) 図書委員会による読書週間の企画

図書委員会では、読書週間・すごろくカードなど様々な企画を通して少しでも図書館利用が増えるようイベントの工夫を話し合っ実践してきた。好きなジャンルの本を選んでもらったり、読んでほしい本をすごろくのマスに加えたりアイデアを出し合っていた。すごろくカードでは、ゴールできると「もう一冊券」や「しおり」がもらえる「お楽しみ企画」を計画し、どのようにしたら図書館の利用者が増やせるかを児童の立場から考える活動ができた。



図書委員会の企画会議



しおり



スタンプカード と ラッキーチケット

(2) 図書館校長先生クイズ

図書館と学校長が連携し、図書館クイズを実施した。クイズは「虫」「星座」「楽器」などテーマがあり、クイズコーナーの近くにはクイズの内容に関連した本を並べたり、付箋を貼ってヒントページを示したり、低学年にもわかりやすいよう工夫した。正解を求めて楽しみにクイズに参加する児童の姿が見られたり、友達と一緒にページをめくって答えを調べたりする姿からは、協働的な学びの場や対話が広がるきっかけとなった。中には図鑑を読みながら主体的に調べ、クイズにチャレンジする児童の姿も見られた。図書館校長先生クイズをきっかけに、学びの場のひとつとして学校図書館の活用ができた。



図書館校長先生クイズ



興味・関心をもって調べる児童



協働的な学びの場・対話

(3) 図書委員とボランティア読み聞かせの連携・朝読書

図書委員とボランティア「おはなしポケット」の方々が連携し、図書委員の児童と読み聞かせボランティアのメンバーがペアを組んで読み聞かせを行った。学年・季節・行事に合わせた本の選択の工夫をし、お話に飽きないよう過去に読んだ本の記録を確認しながら、主に1～4年生を対象に実施している。どの学年も静かに落ち着いて本に触れる時間を設定することができたが、ボランティアの人数の減少のため高学年の読み聞かせは殆どできなかった。高学年児童は各自の読書の時間とし、自分の読みたい本を用意するようにした。読書が苦手な児童にも気軽に短時間で読める朝読書コーナーを図書館に設けるなど、朝読書の定着を図るよう取り組んできた。読書を習慣化することは本に触れるよい機会になっている。



図書委員とボランティアによる読み聞かせ

A L Tによる英語の読み聞かせ

朝読書活動

(4) 特設コーナーの工夫

司書と図書委員とで定期的にお勧めの本や読んでほしい本の入れ替えを行った。朝読書コーナー、国語の単元に出てきた作者の本、人権週間コーナーなど、特設コーナーの入れ替えを行い、いろいろな本の紹介をできるようにした。日頃から本に親しめるようにすることで、「読んでみたい」「これおもしろかったよ」などの声も聞こえ、交流の場にもなっていた。特設コーナーを設置してみて、図書館の環境整備が効果的であることが実感できた。引き続き図書館の本をたくさん紹介していける取組を考えていきたい。



特設コーナーの図書の入替えや、展示の工夫

3 成果と課題

- ・書架の整備や読書に親しむきっかけを作ることは、読書活動活性化に有効であると考えます。今後も児童が読書に興味・関心を広げられるよう取り組んでいくことを考えていきたい。
- ・図書館校長先生クイズは、調べ学習の学びの場となったり学年間を超えた交流になったりしている。今後も工夫をし続けていきたい。
- ・どの学年も本を読まない児童は決まっている。特に高学年になると急に貸し出し数が減っている。図書館が学びの場として有効活用できるよう、計画的に取り入れるよう改善していくことが必要であると感じた。

4 まとめ

本校では読書数減少に課題はあるが、図書委員会の取り組んできたイベント企画などを通して図書館の機能活性化になっている。さらに充実させるためには全教職員の学校図書館についての共通理解を促し、自校の図書館運営について考えていきたい。

能動的・協働的な学びを支える学校図書館
—児童の読書活動を促すための図書館の充実—

高崎市立新町第二小学校 齋藤 陽子

1 主題設定の理由

本校は児童の図書室利用が少ないことが課題であったところ、新型コロナウイルス感染予防対策により図書室利用に制限が設けられたことで、更に利用者が減ってしまった。今年度から少しずつ制限を緩やかにしているものの、利用者は従来ほどにも回復していないのが現状である。

そこで、学校図書館を、能動的・協働的な学びを支えるための存在にするために、図書館を身近な存在にする、本好き、図書館好きの児童を増やすということを目指して設定した。その目標を達成させるためにサブテーマは「児童の読書活動を促すための図書館の充実」とした。

2 研究の概要

図書委員を中心に「行きたい図書室」を目指して、楽しいイベントを企画する。そうすることで、図書室を身近な存在に感じ、積極的に図書室を利用しようという意識付けをする。

○読書意欲の向上を図る

① 〈読書の木〉

借りた本の冊数で、読書の木にりんごをはっていく取組を実施し、たくさん読んだ、もっと読みたいという児童の読書意欲高めるために行った。取組を実施し、児童が達成感をもてるように、りんごに名前を書くことで、友達より借りたいという姿が見られた。

② 〈親子読書〉

親子での交流を通じて新たな図書の魅力を発見し、読書意欲の向上につなげたいと考え実施した。家庭事情が様々であることから、形式は定めず自由な交流を目的とした。親から子へ、子から親へなどで読み聞かせをしたり、図書室で見つけたお気に入りの本の感想を伝えたりと、自由な形態で行った。

③ 〈全校児童、教職員による「おすすめの本」の紹介〉

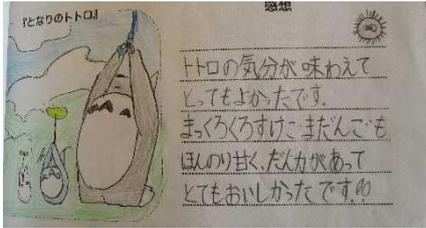
自分が読んでおもしろかった本や、友達に読んでもらいたい本などを、簡単なあらすじにまとめて相手にわかりやすく伝えたり紹介したりする言語活動の充実を目的として実施した。自分の友達や兄弟、教職員など自分にとって親しい人が紹介している本について興味をもつ様子が見られ、紹介された本はよく借りられていた。

○季節のイベント

① 〈コラボ給食〉

本に出てくるメニューを再現したり、またはその作品をイメージしたりしたメニューを給食で3日間提供した。今年度はスタジオジブリの作品をテーマに行ったため、そのメニューが提供される日は、放送委員に依頼して映画に出てくる曲を流した。スタジオジブリの作品の世界に触れてもらい読書意欲を高めることを目的に行った。給食を作ってくた栄養士、給食技師に対して、お礼の手紙を書く活動も行い、交流も図った。

児童の手紙



☆コラボメニュー『となりのトトロ』より

トトロのおえかきバーグ

(ハンバーグにケチャップでトトロの^え絵をかこう!)

とうもろこしたっぷり汁

まっくろくすけ胡麻団子

② 〈ハロウィンイベント〉

本棚にかくれたおばけを見つけるとおばけが紹介している本を借りられるという取組。図書室は静かに本を読む場所であり、探すことはせず、偶然見つかったら貸し出しカウンターに持って行くという約束で行った。同じジャンルの本を借りる児童が多いため、興味の幅を広げてほしい、新しい発見をしてほしいという思いから企画した。見つけた児童はうれしそうにその本を借りていた。高学年の児童より低・中学年の児童の方がたくさん図書室に通う姿が見られた。



▲本に隠されたハロウィンのおばけ。このおばけが持っている本を借りられる。

③ 〈読書週間〉

学期に一度、読書週間を設け、図書委員が中心となって児童が本を借りたくなるようなイベントを実施した。スタンプカードを作って、期間中図書室に来た児童に押印していった。目標を達成すると図書委員オリジナルのしおりをプレゼントしたり、特別な本を借りられたりと楽しい特典がついてくるため、この期間はたくさんの児童が図書室を訪れた。

3 成果と課題

〈成果〉

- ・イベント中はたくさんの児童が積極的に図書室を訪れ、たくさんの本を借りていた。

〈課題〉

- ・マーチング練習、委員会活動などで休み時間がなくなるため高学年の図書室利用が少ない。
- ・図書室を授業での利用が活性化するように、図書館利用計画を見直す必要がある。

4 まとめ

本を読みたいという意欲を高めるために様々なイベントを図書委員中心にして行ってきた。イベント中はたくさんの児童が足を運んでくれるが、イベントが終わると減っていく傾向にあったが、「このシリーズおもしろい」「こんど〇〇という本を図書室に入れてほしい」などといった声が以前よりも多く聞かれるようになった。来年も引き続き、楽しい図書室を目指して取組んでいきたい。同時に図書館が学習の場でもあることを鑑み、今後は更に授業での利用の場を増やしていきたい。タブレットが貸与され、児童の調べ学習はインターネットに偏りがちになってしまっているが、図書室が学習センターとしての役割を果たせるように、図書館指導員と協力して環境を整えていきたい。

「能動的・協働的な学びを支える学校図書館」

— 豊かな心を育む読書指導と図書館利用 —

桐生市立北小学校 須田 澄江

1 主題設定の理由

ここ数年は、コロナ感染症との戦いをずっと強いられている現状であり、ウクライナの戦争やアフリカ諸国の飢餓など、心安らかにという境地になれない社会情勢となっている。そのような中、児童たちも外出を控えたりスポーツやレジャーなどを制限されたりして、ストレスを抱えていると思われる。また、ネット上の動画やスマホゲームなどが身近になっていて、読書離れが一層進んでいる。メディアを取り入れた活動が増え、便利になっていく一方で弊害も心配される。

本校の児童も例外ではなく、担任する1年生においてもゲーム機をほとんどの児童がもっていて、ゲームが好きな児童が多い。家の人が忙しくて、本を読んでもらう機会が減り、好きなテレビや動画を見たり、一人でゲームをしたりして過ごすことが増えていると想像できる。今を生きる児童にとって、豊かな心を育むことができる読書は、とても重要な課題となってくる。じっくり本と向き合うことやいろいろな本と出会うことが、知識や語彙を増やすと共に心を育てることに役立つと考える。学校図書館や蔵書を大いに利用することで、豊かな心を育てていきたいと考える。

2 研究の概要

(1) 主題にせまるための基本的な考え方

1年生は、読む力や語彙力がまだ十分でないので、「読みなさい」と言っても読みたい気持ちになれず、苦痛な時間を増やすことになってしまうので、まずは、本の楽しさに多く触れさせることに重点に置く。また、「読みたい」と思った時にすぐに手に取って読めるような環境作りを行っていく。

(2) 具体的な方策の実践

① 様々な場面で読み聞かせを取り入れ、本の楽しさに触れさせる。

(ア) 音楽の授業内で「ブレーメンの音楽隊」の絵本の読み聞かせを行った。

(イ) 図書委員会による紙芝居の読み聞かせを朝の読書タイムに行った。

(ウ) 3年生との異学年交流で、グループ発表の読み聞かせを聞く機会を設定した。

(エ) 図書館管理補助員との連携で週に3冊程度の読み聞かせや本の紹介をしてもらうようにした。

(オ) 図書給食のメニューの日には、桐生市の配信の読み聞かせをテレビに投影させて見せた。



② 興味関心を高める工夫と、すぐに手に取って読めるような環境作りを行う。

(ア) 学校図書館から廃棄する本の中で1年生向けのものをもらってきて本の冊数を増やしたり、破れていた本を修繕したりして、学級文庫を充実させ、本を手に取りやすくした。

(イ) 学習に関連した本を10冊程度図書館から借りてきて、特別に図書コーナーを作り、表紙が見えるように置いておき、興味関心を引くようにした。

(ウ) 児童が書いた「本のしょうかい」をファイルに入れて掲示し、友達がおすすめしている本が分かるようにして、興味関心を高めた。

(エ) 図書館に入ってすぐの場所に、国語の教科書で紹介されている本を集めたコーナーを作ってすぐに探せるように工夫してある。児童にその本を紹介する機会を作った。

(オ) 図書委員が本を新聞紙で包み、本の紹介を書いたポップを貼って「本の福袋」を作った。これを出前貸し出しに教室に行くと、全員の児童が本を借り、新たな本との出会いを経験できた。



(ア)



(イ)



(ウ)



(エ)



(オ)



3 成果と課題、反省点

様々な場面で読み聞かせを行ったことで、語彙が少しずつ増えると共に本を自分で読もうとする児童が増えてきた。初めの頃は、ミッケや図鑑などを手に取っていた児童も絵本をじっくりと読んでいる場面が見られるようになった。また、読み聞かせを何度も経験したので、3年生が読み聞かせてくれた時には、小さな声でもたどたどしい読み方になっても、最後までしっかりと聞く姿勢が保てた。このことは、1年生が成長している姿だと実感した。図書館の利用も多く、本をたくさん借りている様子が見られた。5月から12月現在で、クラスのほとんどの児童が60～70冊くらい借りることができている。

「本のしょうかい」については、読んだ本の要点をまとめる力が未熟で、伝えたいことが書けなかったり、面白さがずれたりしていることが多かった。

4 まとめ

小学校生活をスタートさせたばかりで不安な気持ちがあったり、感染症対策でストレスを抱えたりしている児童たちに、本の楽しさに多く触れさせたり、居心地の良さを感じ取らせたりすることで、安心して心豊かに過ごせるような教室環境作りに努めてきた。図書館管理補助員と連携をとって、楽しい本にたくさん触れることができている。読み聞かせから発展させて、自分で手に取って読みたいという気持ちを更に高めさせたいと考えている。今後も学校の図書館を大いに活用し、本との触れ合いや友達との交流を通して、豊かな心を育てていきたい。

能動的・共同的な学びを支える学校図書館

— 読書活動の推進を図る取組 —

伊勢崎市立殖蓮小学校 萩原 史子

1 主題設定の理由

一昨年度から、昨年度にかけて、新型コロナウイルスの感染症の流行のために、図書室利用や貸し出しに制限を設けた。今年度からは、制限が大幅に軽減され、児童の自由な利用が以前の状況に近い形にまで、戻すことができた。しかし、制限設定期間に本離れが進んでしまった感が否めない。家庭でも電子機器やゲーム機等、手近な楽しみを優先している児童が増えてしまっている。そこで、家庭や学校における読書習慣の確立や図書室の環境整備（学校図書事務員）、図書委員会による活動を通して、自分に必要な情報を自ら見つけ、日々の学習活動に進んで生かそうとする能動的・共同的な学びを実現することができると考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 家庭や学校における読書習慣の確立

- ・毎月1回程度図書便りを発行し、図書委員のおすすめ本紹介や図書室利用のお願い、クラス別読書量調査結果等を載せている。
- ・読書数が50冊になった児童には、学校図書事務員手作りのしおりを渡している。励みにしている児童も多い。
- ・今年度より、学年ごとに曜日を決め、読書を宿題として設定している。家庭で、一定時間読書する習慣を付けている。市から配布された読書通帳を全校児童に配布し、1冊記入が終わったら、大きなシールを貼っている。
- ・毎日、15分の朝読書時間を設定し、図書室で借りた本や学級文庫の本を静かに読む活動を行っている。その際に読む本は、マンガやクイズ等でなく、物語、小説等になっている。



(2) 図書室の環境整備・学校図書事務員との連携

- ・図書室廊下には、図書委員作成の「おすすめ本紹介コーナー」を設置している。児童は興味をもって本選びに役立っている。
- ・雑誌「ちゃぐりん」の手作り紹介コーナーのページに載っている物を学校図書事務員が手作りし、展示紹介している。季節や行事に即した作品も多く、児童の興味を引くとともに、温かみのある親しみやすい図書室を作っている。



- ・新着図書をカウンターそばに置いたり、学年ごとの教科書に載っている本やシリーズ物の本、時事問題に関連した本などのコーナーを設けるなど、図書室の配架の工夫を行っている。

- ・学校図書事務員が、日々届けられる新聞の記事を分野毎に整理しファイリングしている。児童は恐竜や料理、SDGs等、興味のある事柄の新聞記事を読んだり、授業での調べ学習に役立ったりしている。



- ・国語や社会、総合等の学習で使う図書をまとめて、教室で使用している。単元によっては、市立図書館との連携を取りながら借りてくることもしている。

(3) 図書委員会による活動

- ・毎週水曜日の給食時間に全校放送で、図書委員が本の読み聞かせをしている。本選び、練習等熱心に行っている。読み聞かせ後、図書委員会児童が、自主的に図書室利用の呼びかけや返却期限のお知らせ等の放送を行っている。

- ・読書のすすめや貸し出し期限を守ることを伝えるポスターを作成し、各クラスに伝えた。



3 成果と課題

図書室の環境整備や配架の工夫などにより、読書や学習のために必要な本を見つけやすくなっている。図書委員の活動により、多くのジャンルの本に興味をもつ児童が増え、読書数も増加している。しかし、貸出期限を守らず延滞している児童が多いという課題もある。家庭での読書宿題は、今年度から始めたが、まだ十分徹底してはいない。家庭への啓蒙活動を進めたり、読書カードの工夫等を行ったりしていく必要がある。

4 まとめ

図書室の環境整備や家庭との連携、図書委員の意欲的な活動などによって、読書活動の推進が図られている。これからも、単に読書の冊数を増やすのではなく、好きな本をじっくり読みたい、興味のあること、知りたいことがあるから本を探したい、という児童を増やしていくための工夫をし、児童の主体的な学びを支えていきたい。

1 主題設定の理由

近年、学習活動において ICT を活用する場面が増え、児童は学習の情報源を図書から ICT に移行している様子が見られる。そのため、本校でも、調べ学習の際に児童が図書室に足を運ぶ回数が減っている。さらに、新型コロナウイルス感染症の流行で、密を避けるために休み時間の貸し出しを学年ごとに分ける状況が続いており、積極的に図書室を利用する習慣が維持できなくなっているように思われる。

そこで、図書館補助員と連携して、少しでも図書室に足を向ける児童が増え、読書活動が活性化できるよう本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 図書配架のリニューアル

必要蔵書数以上の本が整理されずに置かれていた棚を整理し、精選した本を児童の目にとまりやすいように並べた。また、文学のコーナーが、書名の五十音順で同じ種類の本を読み進めるなどができなかったものを作者名の五十音順に変更した。



(2) 季節コーナー

季節の本（12月にはクリスマスに関する本など）の紹介展示をしたり、四季の味わいのある飾り付けをしたりするなど図書室環境を整えた。

(3) 読書週間



読書週間を設け、期間内に2冊本を借りた児童のために葉を準備した。

今年度は、色画用紙を切った葉作り材料を渡し、自分の好きな絵を描いて図書室にもって来ると、パウチし、リボンをつけて渡す形にした。

図書日よりで、読書習慣のイベントを全校に知らせたほか、図書委員も、休み時間には各学年の廊下で宣伝を行った。

(4) 福袋

冬休みに向けた2冊貸し出しの際に、「福袋」として、本を1冊入れた袋を用意した。中に入っている本は、図書委員の児童が自分の当番日の学年にふさわしいと考えるおすすめの本を中心に、高学年用には、図書館補助員が少し読み応えのある本を用意した。

(5) 環境学習コーナー

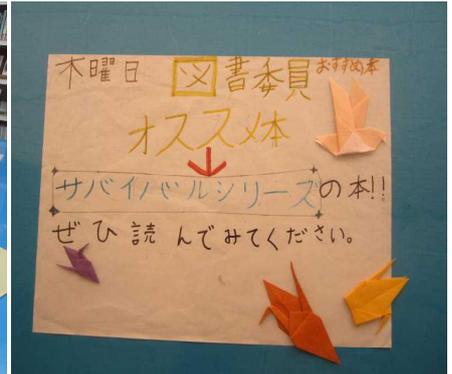
環境の学習の調べ学習に利用できる本は、環境コーナーを作ってまとめ、利用しやすいように配慮している。



(6) 委員会活動

図書委員は、常時活動として当番の日には、20分休みと昼休みにバーコードを使った図書貸し出しを行っている。本の配架リニューアルの際の図書整理や図書室環境整備などは、常時活動の中で行った。

また、委員会の時間を使って、本の紹介カード作成や紙芝居の読み聞かせ練習（新型コロナウイルス感染症拡大を受けて現在読み聞かせが延期されている）を行っている。



(7) 市の図書館との連携

P T A 教養部の活動として、各学期ごとに、市の図書館からまとめ借りをを行っている。昨年度までは、各クラス30冊の本を借り、学級文庫としたり、国語学習の並行読書としていたりしたが、今年度からP T A活動が縮小され、教養部の人数が減ったため、学年30冊のまとめ借りをしている。

3 成果と課題

- 図書配架のリニューアルによって棚のスペースが生まれたことで、おすすめの本が児童の目に触れやすくなり、読んだことのない本にも興味を持つ児童が見られるようになった。
- 読書習慣の葉は、材料を渡す形にしたことで準備が楽になった。さらに、もらう側にとっても、自分の好きに描いた絵をパウチしてもらえることで、葉が魅力的になり、友達がもらったものを見て、自分もほしいと図書室へ足を運ぶ児童がいた。
- 福袋は、冬休みに向けての初めての試みである。書名とおすすめの内容がかかかれているが、中身が見えないことで、児童はわくわく感をもって本を借りている。新しい本との出会いに繋がることを期待している。
- 新型コロナウイルス感染症拡大を受けて図書委員が低学年のために練習した読み聞かせが、今年度内に行えるのか課題が残っている。

4 まとめ

新型コロナウイルス感染症拡大のために休校で始まった年度と比べると、本の貸し出し冊数が増えるようになったが、それ以前との比較ではかなり少ない。蜜を避けるための学年ごとの貸し出しでは、昼休みに借りに来る人数が少ないので、学年事情を考慮するなど工夫ができると考える。学習センター・読書センターとして、図書室がもっと生かされるよう努めていきたい。

能動的・協働的な学びを支える学校図書館
—主体的な図書利用を促す環境構成の充実—

沼田市立利根小学校 丸山 みのり

1 主題設定の理由

本校は、全校児童79名の小規模校で、3つの小学校が統合され開校して7年目を迎えた。蔵書数も充実しており、図書室の他に学級文庫や学年ホールに本が配架され、いつでも本に触れることのできる環境に恵まれている。

一方で児童の実態として、本を読む児童と読まない児童の2極化傾向が顕著であり、自分から進んで本を読もうとする児童は限られている。また、本は借りるけれども読書傾向が偏り、いろいろな本を手にする児童が少ないことが伺えた。そこで、図書室の環境整備を整えるとともに、継続的に本に親しみ、いろいろなジャンルの本に触れる機会を設けることで、児童の読書習慣作りと発達段階に則した、児童期にふさわしい本を進んで読もうとする児童に育つことを願い、本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 魅力ある図書室環境と図書コーナーの設置

コーナーごとに同じジャンルの本を配架し、新刊コーナーや図鑑・学習に役立つコーナー、伝記や昔話など、児童が読みたい本をすぐ探せるよう、どんな本がどこにあるかを分かりやすく配架した。また、作者シリーズとして、地元作家の宮川ひろコーナーを別置。特設コーナーとして「SDGS (エスディージーズ)」、企画コーナーとして「いじめ・人権図書」を設けた。さらに、図書委員によるおすすめの本の紹介カードを掲示した。読書集会では、図書室から「先生方のおすすめの本」を選んでもらい、クイズ形式で紹介し展示するなど、児童が本を手にしやすいよう、魅力ある図書室環境に整備した。



↑人権に関する本のコーナー



↑地元作家・宮川ひろコーナ



←先生方のおすすめの本の展示



SDGS (エスディージーズ) コーナー (下)
とその関連資料→



(2) 推薦図書の提示と働きかけ

図書室入り口の一角を「本の扉をあけてみよう～ぐんまの小中学生に贈る131冊」コーナーとして平積みし、さらにその下の本棚を活用して、学年ごとの「国語関連図書」を配架した。それぞれの該当図書には、目印のシールを貼り、児童だけでなく教員にも活用してもらえるよう意識付けを図った。



↑「ぐんまの小中学生に贈る131冊」コーナー



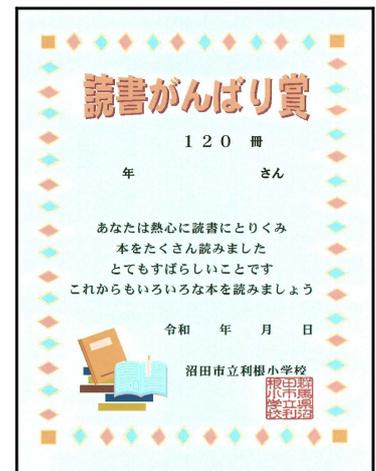
↑各学年ごとの「国語関連図書」コーナー

特にこの2つのコーナーについては、自分の学年が終わるまでに該当する本をなるべくたくさん読めるよう呼びかけ、月に1度ある「家読（うちどく）の日～家族で本を読みましよう」の日の前には、家の人と一緒に読む本を図書室から選ぶ際にも推薦図書として啓発を行った。

(3) 継続的な図書利用指導の工夫

児童個々の図書室利用状況の実態を把握し利用指導に生かすため、2ヶ月毎に担任に知らせ、よく図書室を利用している児童、不読傾向の児童の状況を知らせるとともに、個別の読書指導に役立ててもらおうようにした。

また、総計30冊以上（桃）、60冊以上（黄）、90冊以上（緑）、120冊以上（青）の色別多読賞を学期ごとに作成し、担任から児童へ渡してもらっている。継続的に図書室を利用することで、学期ごとに、年間3枚の違った色の賞状がもらえるシステムにし、児童が図書室に足を運ぶ機会が増えるよう試みた。



↑学期ごとの多読賞

3 成果と課題、反省点等

たくさん本がある中で意図的にコーナーを設置し、児童に読んで欲しい本を表出したことで、コーナーの本を手にする児童が圧倒的に増えた。どんな本を読んだらよいか分からない児童が、まず推薦図書のコーナーの本を手にししようとする姿も見られ、短時間で読みたい本を選べる児童が増え、図書室の利用拡大につながった。

不読傾向の児童への声かけを担任と連携しながら進めていくことが今後の課題である。また、子どものニーズや教科指導に活用できる図書の選定をして蔵書を充実させていきたい。

4 まとめ

本校の児童は実直で、様々な呼びかけや取組によく反応してくれる子が多い。いろいろな本に手を伸ばす児童が増え、本のおもしろさを語る様子もたくさん見られるようになった。さらに、児童が読書の幅を広げ本を活用できるよう、この取組を継続させていくことが大切である。

1. 主題設定の理由

「子ども読書活動の推進に関する法律」(平成13年に制定)に基づく次期の計画策定に向け、文部科学省において、「令和4年度子供の読書活動推進に関する有識者会議」が行われた。その中の基本的方針において、「読むこと自体の楽しさ、それによる充実感、満足感を得ることが重要である。子供の頃のそうした楽しかった体験は、生涯にわたる学習意欲やウェルビーイング (Well-being) につながるとともに、将来、その体験を子供たちに共有していきたいという動機になり、世代を超えた読書活動の推進の循環が形成されることが期待される。」と述べられている。

社会変化が著しい時代において、読解力や想像力、思考力、表現力等を養う読書活動の推進は不可欠であると言われ続けてきた。本校では、図書館に毎日通い夢中になって読書をする児童の姿が見られる。しかし、選ぶ図書の分野に偏りがあったり、進んで本を読む意識が少なかったりする児童もいる。そこで、さまざまな効果を児童自身が実感しながら「読む喜び」を育み、生涯にわたる学びにつながるような日常的な読書活動の充実を目指して実践を行った。

2. 研究の概要

(1) 各学年の廊下に図書室からの出張本棚設置

各学年2学級の前にブックトラックを設置した。児童の身近に図書があり、すぐに手に取れる環境を作った。本校の図書室は2階にあり、学年によっては教室からの距離がある。また、学年が上がると、休み時間に図書室へ行く時間を作るのが難しくなる現状がある。物理的な距離や時間だけでなく、読む本に偏りが出てくる。そこで、各学年の国語の学習状況に合わせた本を置いたり、普段は手に取らないような本を紹介したりできる場所を設置した。

(2) 図書委員による読書推進企画

教室の近くに図書がある環境を作り、その上でさまざまな図書に触れる機会を増やすために、学期に2週間ずつ、図書委員が中心になり、読書推進企画を行った。

1学期は、まずは図書室に足を運ぶ回数を増えるように、本を借りるとくじを引く企画を考えた。当たりくじを引くと、図書委員手作りのしおりがもらえる内容を児童が考えて実施した。その結果、図書室の入室者数は、通常の2倍近くになった。

2学期は、読書の秋と一緒に読書の幅を広げられるように、図書ビンゴカードを作った。低学年・中学年・高学年と3種類のビンゴカードの本のジャンルを図書委員が考えた。ビンゴになるためには、期間中3回以上は普段読んだことのない分野の本を手にとらなくてはビンゴにならない。また、図書委員から高学年の挑戦が少ないのではないかと指摘があり、各学級に呼びかけて、高学年の貸し出し冊数も伸び、異分野の本を読むことができた。

さらに、図書室環境の整備も行った。図書委員おすすめの本紹介コーナーや実際にその本をすぐ借りられるように、特設場所を作る工夫をした。



(3) 授業における図書室の本、新聞の活用

6年の国語における実践例として、「私と本」において、ビブリオバトルを開催した。おすすめしたい本を一人一冊紹介し、投票でどの本がチャンプ本になるのかを決める書評合戦という言語活動を設定した。普段児童が感じている以上に、さまざまな分野の本が紹介された。紹介する児童が一番のおすすめを伝えてくれるので、読みたいという気持ちになる児童が多く、大変盛り上がった。各学級でのチャンプ本を決め、廊下の出張本棚に紹介し、読書の機会を増やすことにつながった。



5年の国語における実践例として、「新聞を読もう」や「統計資料の読み方」において、新聞の活用を行った。本校はNIE実践校になっており、新聞コーナーを設置している。図書室には子ども新聞を、5・6年生の廊下には3種類以上の新聞を毎日置いた。いつでも児童自らが新聞を手にする機会が増えただけでなく、学習に活用する頻度も多くなった。

(4) 20年以上続く読み聞かせ隊

本校では、20年以上続いている有志の読み聞かせ隊がいる。2週間に一度のペースでコロナ禍前は読み聞かせを行っていたが、ここ数年中止していた。しかし、本年度は感染対策を取りながら、読み聞かせを再開した。やはり、実際に本を読み聞かせしていただく機会は貴重で、児童は目を輝かせてその時間を楽しんでいる。読み聞かせしていただいた本を図書室で紹介するなど、再度児童が自分で手に取って読める工夫をしている。

3. 成果と課題、反省等

(1) 成果

出張本棚や図書委員の読書推進企画などにより、児童が本を手にして読書をする機会が増えた。さらに、自分だけでは今まで読まなかった分野の本であっても、手に取ってみようとする姿や児童同士でおすすめの本の紹介をし合ったりする姿が見られた。学習面から図書や新聞の活用をすることが児童の読書の大きなきっかけになるということを感じた。また、図書委員が「よりよい図書館にするのは自分たちだ」という意識をもち、企画、準備を行ったりできるようになった。児童発信の内容は、より多くの児童に伝わるということを実感した。

(2) 課題

日常的に読書を楽しむ児童がいる一方で、全く本を借りない児童も学級には数名いる。その学年ごとのおすすめ本や話題にのぼっていること、学習につながるものなど、読書を日常的に行うことが習慣となり、「読む喜び」につながる手立てを考える必要があると感じた。今後は、児童だけでなく、保護者や教職員も巻き込んで、魅力ある図書室の活用法を発信できるよう努めていきたい。

4. まとめ

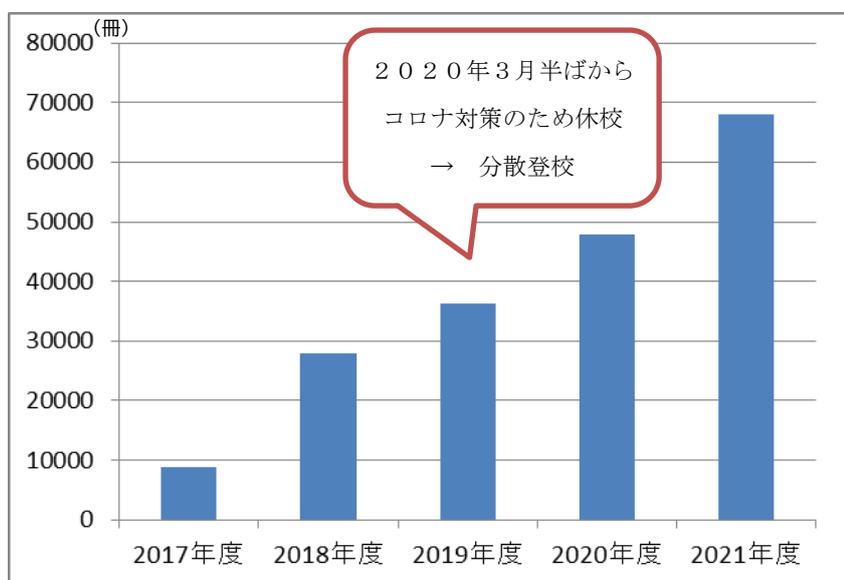
今回の実践を通して、学校図書館や読書活動が、児童の心の成長や深い学びにつながるということを改めて再認識した。これまで以上に、工夫を重ね、生涯にわたる学びにつながるような日常的な読書活動の充実を考えていきたい。

1 主題設定の理由

自然豊かな立地条件にあり、外遊びの大好きな元気いっぱいの子どもたちの通う本校では、学校図書館は6年前は年間の貸し出し数の合計が8924冊と決して多いと言える数ではなく、せっかくの図書室や蔵書を十分に利用できている状況ではなかった。当時の司書教諭や学校司書の努力もあり、翌年には年間貸し出し数が27943冊にまで上がり、その後も順調に図書の利用が増え、児童にも身近な図書室となってきていた矢先、コロナ禍が起こり、図書室の利用についても制限ができてしまった。そのはずなのに、子どもたちは相変わらず読書が好きで本に親しんでいる様子が伺える。その理由は何なのか、探してみたいとこの副主題を設定した。

2 研究の概要

まず、本校の過去数年間の年間貸し出し数の変化は以下のようになっている。



ここで、どんなことが起こっていたのか考えてみる。

2020年3月、学校は、見えない新型コロナウイルスとの初めての戦いで、いろいろなことが制限された。図書の利用もその一つであった。今まで、毎日、好きな休み時間に1冊（金曜日は2冊）借りることのできた図書も、人流の抑制のため、学年毎に使用できる時間を割り当てられた。毎日のように図書を利用していた子どもたちは、さぞがっかりしたことだろう。

だが、週に1度の利用になった代わりに、1回に借りられる冊数を2冊に増やし、必ず担任が授業時間に図書室に連れて行く（そこでは読まず、貸し借りのみする）ことになったことが、思わぬ功を奏した。

以下、当時をふり返った国語教諭たちの声である。

- *利用できる時間が割り当てられ、授業時間内に担任が必ず図書室に連れて行く、ということで、今まで外遊びばかりで図書室に行かなかった児童たちが、その時間に必ず借りるようになった。
- *子どもたちが実際にどんな本を読んでいるのかがよくわかるようになった。
- *今まで自分ではしなかった貸し出し業務をすることにより、担当クラスの児童の好みや一人ひとりの貸し出し量をリアルタイムで把握できるようになった。また、これをきっかけに担任と児童とのブックトークが密にできるようになった。
- *子どもたちに人気のコーナーがわかった。自分も、図書室のどこにどんな本があるのか把握できるようになった。司書の先生にも「今度授業でこんな本を使いたい」と相談しやすくなった。

これらのことから、もともと読書好きだった児童らはもちろん、今まで気持ちが読書に向いていなかった子どもたちが、担任の先生とお話ししながら好きな本を見つけていくことができたことが、今でも

本好きな児童が随所に見られる大きな要因の一つではないかと考える。

さらに、2018年と2021年の曜日別貸し出し数で比較してみると、2018年は脈絡なく貸し出し数が増減しているのに対し、2021年はそのようなことがない。このことから、今までは「雨だから」などの理由で図書利用の増減があったが、図書室の棲み分けを行ったことで、安定して利用者が来られるようになったことが伺える。すべての子どもたちに図書を利用する時間を確保できたことが、現在の本に親しむ姿につながったと言ってよいだろう。

3 成果と課題、反省点等

本校では、コロナの状況を鑑みて、段階的に授業時間内の3冊貸し出し、授業時間の他に休み時間を割り振っての貸し出しと、さらに図書室利用の幅を増やす試みも随時行ってきた。コロナ前の「1人1日に1冊（週末は2冊）毎日貸し借り可」と現在の「1人1回3冊。授業日と決められた曜日の休み時間の週2回」では、1人の児童が1週間に借りられる冊数は6冊と同じである。にもかかわらず、コロナ前から倍増する勢いで貸し出し数が伸びたこと、2022年度も順調に伸びていることは、この対策が児童にも教員にもよい影響を与えていることの成果である。実際、2021年度からは、授業では変わらず担任が連れて行くが、休み時間に借りに行くのはコロナ前と同様本人の自由意志である。その休み時間にもコンスタントに借りる児童がいないとこの数字は出ないので、自ら「読書をしたい」と通う児童が増えたのだと考えられる。

ただ、コロナ前に自然にできていた図書室での学年間交流は、あまりできなくなってしまう。図書委員会等の企画で他の学年や先生たちとの協働的な学びを追究できる活動を取り入れたい。「本を読みたい!」と思える、「この本楽しい!」と紹介し合えるような活動をもっと取り入れ、能動的・協働的に図書を利用していってもらえるようにしたい。



4 まとめ

コロナ禍における、「それでも学校図書館にできること」が問われたこの数年だったと思われる。しかし、実際に調べてみたら、本校では読書に親しむ子は逆に増えていることがよくわかった。担任と学校司書の距離が近くなったことも、授業での図書利用が、図書室に限らず、必要な本を必要な分だけ学校司書が探して担任のもとに届けてくれるおかげで教室でできるようになったことに繋がった。とにかく、暗い気持ちになりがちだったコロナ対策だったが、それが思っている以上に役に立っていること、少しのきっかけでよいものはよいと受け入れられるものだというのを再認識し、今後も学校図書館を、子どもたちの学びの支えとして活用していってもらえるよう、司書教諭と学校司書、図書委員会、町の図書館部会が連携して活動していきたい。



町の図書館と合同で行っているスタンプラリー



図書室の掲示の工夫（多読賞、教科書に出てくる本のコーナー）

1 主題設定の理由

本校は全校児童14名の小規模校である。学校図書館では、一週間に一人5冊の本を借りることができ、長期休業中には10冊まで借りることが可能である。また、調べ学習等で図書館を活用する際には、一人一人に十分な資料が行き渡るなど、大変恵まれた環境にあるといえる。

たくさんの本に恵まれている児童であるが、読書内容には偏りが見られる。物語を好んで読む児童が多いのはもちろんであるが、絵やイラストが多い本、漫画仕立ての作品、占いや趣味に関するものをよく読んでおり、自然や科学的な読み物に関する興味関心が高いとは言えない。国語の教科書には、学習に関する本がたくさん紹介されており、本校図書館にも学年ごとに『教科書に載っている本』のコーナーを設けているが、そこから自主的に本を借りて読む児童は少ない。しかし、学習を進めていく中で興味や関心が高まった内容については、関連する本を借りて楽しそうに読む様子も見られる。

そのような状況から、学級担任が児童と学校図書館との架け橋となり、学習に関連する本や科学的な読み物へと児童の興味・関心をつなげることができたら、児童がさらに知識を広げたり考えを深めたりすることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

2 研究の概要

研究は主に担任をしている3年児童を中心に行った。

<担任の働きかけ>

①本を決めてじっくり読み、調べたり書いたりする活動

ア 本校3年の総合的な学習の時間のテーマは「かいこ博士になろう」である。1学期は蚕の育て方について調べ、実際に蚕を飼育した。蚕について調べるために、一人一冊蚕に関する本を選び、1学期の間はずっとその本を手元に置いて調べ学習を行った。児童は、気になることや分からないことがあると、すぐに自分の持っている本を見て調べる様子が見られた。

イ 国語では、説明文「すがたをかえる大豆」で学んだ文章構成を生かして説明する文章を書くことをねらいとした、「食べ物のひみつを教えます」という教材がある。牛乳や芋等、いろいろな食品にすがた変える食材に関する本を読み、それを基に説明する文章を書く学習である。児童が学習に関連する本を選んだ後、内容をしっかりと把握することが出来るように、国語の時間や朝読書の時間を使って、時間をかけてじっくり読む時間を設けた。



②読書の木

『教科書に載っている本』や科学的な読み物にも興味をもってほしい、様々な本を読んでいることを実感してほしいという願いから、教室前の廊下に「読



書の木」を設けた。児童は本を読み終えたら、「読書の木」に本の名前と自分の名前を書いた葉の形の紙を貼る。教科書に載っている本を読んだら黄色の葉、科学読み物を読んだら赤色の葉、その他の本は緑色の葉を貼っている。

<学校図書館司書の協力>

①人権週間等の行事に関する本の選定と掲示

図書館司書には、児童が興味関心をもち手に取りやすいよう、季節や行事の本を選び、出入口付近に並べてもらった。年に2回ある人権週間では、人権に関する本の選定をしてもらい、担任がその中から選んで道徳や朝読書の時間を使って読み聞かせを行った。



②学校図書館の利用の仕方（3年生向け）

児童が図書館に興味をもち、利用しやすくなるよう、図書館の配架について図書館司書に説明してもらった。児童は、どんな本がどこにあるかを確認して模造紙にカードを貼り、図書館の配架図を作る活動を行った。



3 成果と課題

◇総合的な学習の時間では、自分の決めた本をよく読んでいた。疑問に感じたことや不思議に思ったことがあると、友達の本と内容を比べながら読み、蚕についての知識を広げることができた。蚕以外の昆虫に興味をもった児童も多く、普段あまり読まない図鑑や昆虫に関連する本を読む様子が見られた。

◇国語の学習では、じっくりと読むことで書く活動へとスムーズに移行できただけでなく、児童の興味関心が高まり、自ら関連する本を借りて読み、楽しみながら活動を行うことができた。

◇人権週間中、自ら手に取って人権に関する本を読む児童は少ないが、担任が読み聞かせを行うとよく耳を傾けて聞き、その後の道徳での話し合いが深まった。

◇図書館の配架について説明してもらった時間では、どこにどんな本があるかを熱心に探していた。今までほとんど存在を意識していなかった「百科事典」のコーナーを知り、その後の調べ学習で百科事典を使うことができた。

◆担任から、声かけや読み聞かせ、教室に学習に関連する本を並べる等の働きかけがあったときには、児童の興味関心が高まるが、それを持続するのが難しい。

◆学習や本の選定に図書館司書を活用することが少ないように思われるため、もっと連携を密にし、本の選定やサポートをお願いするようにしていきたい。

4 まとめ

本に対する興味や関心が高まった児童は、目を輝かせて本を読み、内容を嬉しそうに教えてくれる。そんな児童の姿をたくさん見ることができるよう、これからも担任として積極的に児童に働きかけをし、児童が様々な本とふれあえる機会を設けていきたい。そのためには、図書館司書との連携を密にし、図書館が児童にとって心地よく、活用しやすい場所になるような工夫をしていくことが大切だと感じた。

能動的・協働的な学びを支える学校図書館

— 読書活動の活性化や図書館活動の活性化 —

富岡市立富岡小学校 新井晶子

1 主題設定の理由

本校では、児童の読書意欲を維持し、さらにはそれが向上していくために、様々な取り組みを行っている。それらの活動を改めて見直したり、まとめたりすることを通して、今後の学校図書館の役割や意義を再確認し、よりよくするために本主題を設定した。

2 研究の概要

読書活動の活性化や図書館活動の活性化のために、本校ではどのような活動を行っているのか以下に紹介する。

(1) 「読書の達人」達成者・多読賞達成者の紹介掲示

富岡市では、市立図書館が「読書の達人」と称して、低学年、中学年、高学年のそれぞれに向けて、おすすめの書籍を提示している。それと連携して各学年で読書カードを作成し、児童に配付している。児童は、その読書カードに記載されている「読書の達人」の書籍の中から、読んでみたいものを選び、12冊以上読むと、「読書の達人」の賞状をもらうことができる。本校では、「読書の達人」を達成した児童の名前をシールに記入して、図書室の廊下壁面に貼っている。



また、本校独自に「多読賞」というのを設けて、指定の冊数以上を読んだ児童には、読書カードにワッペンを貼るとともに、「読書の達人」と同様に廊下に記名シールを貼って掲示している。

(2) 図書委員会での取り組み

本校の図書委員会では、委員会の児童を中心に読書活動の活性化のために、様々な本に親しんでもらう取り組みを行っている。

①各学年クラスに図書を配付

図書委員会の児童がおすすめの本を20冊選んで、各学年クラスに配付している。図書委員の選書の力を向上させるためだけでなく、各学年の児童が様々な書籍に触れることのできるよい機会となっている。



②各学年におすすめの本を紹介

図書委員会で、担当学年を決め、その学年に合った本を選び、本の内容を模造紙などにまとめ、学年の廊下の掲示板に掲示している。



(3) 食育と図書とのコラボレーション

学校栄養士が中心となり、給食センターと連携して、図書と関連した献立を考へたり、逆に献立をもとに図書を選んだりして学校内に掲示し、紹介した。読書週間に合わせて紹介したり、特定の日に合わせて紹介したりした。



(4) 図書室の環境整備

児童の読書意欲が向上できるように、また、本や図書室への親しみをもつことができるように様々な環境整備に努めている。



3 成果と課題

本校の読書活動の活性化のための取り組みにより、本校児童の読書への関心が維持され、特に低学年において読書への意欲関心が高まっている。しかし、学年が進むにつれて、読書への関心が薄くなり、高学年においては読書時間が減る傾向にある。また、タブレットの普及に伴いネットを使った調べ学習が進み、図書館の利用が少なくなっている。高学年における読書意欲の向上や図書館利用のさらなる活性化が課題として挙げられる。

4 まとめ

本校での、様々な取り組みをまとめてみると、図書室事務員や学校栄養士、図書委員会担当など、それぞれの職員が立場や役割をもとに読書活動の活性化や図書室利用の推進のために努力していることがうかがえた。それぞれの協力や支援のおかげで学校図書が成り立っていることが分かる。これらの活動は、一朝一夕でできるものではなく、日々の積み重ねの賜である。これらの活動を通して本校の児童の読書活動が維持されている。これらの活動を維持継続し、よりよいものへ改善していくために、各担当職員や外部施設などとの連携を深めていきたい。

「能動的・協働的な学びを支える学校図書館」

—学校図書館の運営と読書活動の活性化—

安中市立磯部小学校 上原千春

1 主題設定の理由

本校は地域の方や保護者による読み聞かせボランティア活動が以前から熱心に行われており、楽しみにしている児童が多い。また、朝活動にも読書の時間があるので、全校で読書に親しむ機会が設けられている。一方で週時程に読書の時間が設定されている低学年のうちには学校図書館に足を頻繁に運ぶものの、学年が上がるにつれて本の貸し出し数が少なくなり、利用する児童が固定化されてきてしまう傾向がある。これらのことから、魅力的な学校図書館の運営と読書活動を工夫することで図書館利用を促し、様々な分野の本に触れ、児童が新しいことを知り、心を豊かにすることにつながると考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

児童が訪れたいくなる図書館運営や読書活動を工夫することで、図書館利用を促し、様々な分野の本に触れ、読書の質を高め、幅を広げる取り組みを考えた。

○季節に親しめる掲示や本の展示

季節や行事に応じた掲示や本の展示を行った。立ち止まって対象の本を確認したり、手に取り楽しんだりする様子が見られた。低学年には展示された本の読み聞かせもした。本からわき上がるイメージからイラストを描いてくることもあった。描いてきた作品は廊下に展示され、児童同士の交流の場となっている。



○読み聞かせ活動

地域や保護者のボランティアによる読み聞かせの他、5、6年生の図書委員会の児童も読み聞かせを担当している。下級生の児童が楽しそうに聞いてくれる様子を見て「またやってみたい。」と話す児童もいた。地域の方の中には、地元磯部地区に伝わる昔話や民話の本の読み聞かせもあった。そのことをきっかけに、2年生では地域の方を講師に招いて、生活科での地域学習へと発展させることができた。



○移動図書館

授業や休み時間に図書館に来ることが少なくなってきた5、6年生を対象に、廊下にブックカートをおいて移動図書館を設置している。本は概ね1ヶ月を目安に入れ替えている。選書は図書委員会の児童と司書教諭だが、担任からのリクエストで授業に関連した本を置くこともある。給食の準備時間などの

隙間時間にブックカートに立ち寄って本を読む児童の姿が見られた。

○給食とのコラボレーション

児童から本と給食メニューのリクエストを受け、栄養士、給食調理員に全面的に協力してもらい、およそ1ヶ月に1回のペースでコラボレーションを実施している。リクエストされる本は低学年でも楽しめるような絵本が多い。給食のメニューでの紹介に



加え、当日は校内放送による読み聞かせも行っている。また、レシピも図書館に用意しているので、自宅に持ち帰り家庭で料理してもらおう児童もいる。コラボレーションの実施により、関連本の貸し出しが増えるほか、メニューのリクエストをしようと本を探す児童の姿も見られるようになった。給食を楽しむにするなど食への意識も同時に高まっていることがわかる。

『給食番長』とコラボ・・・カレーとひじきのサラダ

『パンどろぼう』とコラボ・・・なぞのフランスパン

『14ひきのおつきみ』とコラボ・・・お月見汁

○先生のおすすめの本

毎年恒例の企画で、各教職員が児童に読ませたい本を1冊選び、その本の良さを記入したカードを廊下に掲示、図書館内には実物の本を展示している。担任の先生はもとより、親しみのある先生の紹介カードをうれしそうに見ながら、本を選んでいる児童の姿が見られた。この企画をきっかけに、長編の物語に挑戦する児童もいた。



○図書便りと図書日記

毎月児童に配布される図書便りは、学校HPにも掲載している。また、図書館の企画や給食のコラボ等、紙面だけでは紹介しきれない内容については「図書日記」の項目で随時発信している。学校図書館の取り組みを親子で情報共有することができ、児童の本への関心が高まりや図書館利用を促すことにもつながっていると思われる。

3 成果と課題

司書教諭や図書委員会が企画した取り組みに参加して、1冊追加で本を借りることのできる「プラス1冊券」の特典を楽しみにしている児童も多く、そのことが貸し出し数の増加にもつながった。新刊本や特設コーナーの設置では、今まで積極的に手に取らなかった分野の本を借りたり読んだりする姿も見られるようになってきた。気に入ったシリーズを見つけて読んでいる児童も増えた。しかし、高学年になると年間の貸し出し数が数冊の児童も見られるなど個人差が大きいので、全ての学年の児童が利用したい学校図書館にするための更なる取り組みも必要である。

4、まとめ

学校図書館の運営の工夫と読書活動の活性化は、本に触れる機会を増やし、様々な分野への興味関心を広げていくきっかけとなる。読書活動は、いろんなことを頭の中で擬似体験したり、新しい知識を身に付けたり、興味を広げたりすることで、能動的・協働的な学びにつながっていくものと考えられる。

能動的・協働的な学びを支える学校図書館

－ 読書の魅力を広げる活動を通して －

みどり市立大間々東小学校 五十嵐 まさみ

1 主題設定の理由

令和元年度末から続く新型コロナウイルスへの対応により、本校では、休み時間の図書室利用を各学年週1日に限定して他学年と接触しない措置をとってきた。その結果、来室する児童が減り、図書の貸し出し数も減少することとなった。また、図書委員や地域ボランティアによる「読み聞かせ」が行えなかったり、校時表の見直しにより、全校で取り組んでいた「朝読書」ができなくなったりと、本の楽しさを伝える活動の縮小、児童が本に親しむ機会の減少が重なってしまった。加えて、一人1台端末の整備により、課題解決学習の過程における情報収集がインターネットの活用に偏り、多面的な情報収集や吟味した上での情報活用がまだまだ不慣れな様子を見受けることも多くなった。

これらのことから、児童に読書の魅力伝える活動を可能な範囲で再開していくこと、また、「学習・情報センター」として、情報の収集・選択・活用能力の育成に貢献できる場として図書室を整備していくことが、本校の課題であると考え、本主題「能動的・協働的な学びを支える学校図書館 － 読書の魅力を広げる活動を通して －」を設定した。

2 研究の概要

(1) 「学習・情報センター」としての機能の整備

まず、蔵書点検を行い、次の課題が明らかになった。

- 近年は読書感想文・感想画コンクールの課題図書を毎年各3セットずつ購入しており、比較的新しい蔵書にジャンルの偏りが著しい。児童に人気のある本や児童の学習活動に必要な本は傷みが激しかったり、情報として相当古く活用できなかつたりする。
- 「〇年生の本」「〇〇コーナー」などが常時多数設けてあり、日本十進分類法によって探しても該当の書架に本が見当たらない。同一シリーズが分散していたり、〇年以外はその書架は利用してはいけないという暗黙ルールが児童間に生じたりしている。
- 40年以上昔に購入され廃棄されないままの本、対象が小学生ではない単行本や学習雑誌の付録、受験参考書などが入り混じり、高い棚まで雑然と詰め込まれている。児童が興味を示す棚はごく一部に限られている。

そこで、以下のことに取り組んだ。

- ① 複数あるもので利用されていないもの、傷みの激しいもの、利用されないまま数十年残されているものを廃棄。天井近くの棚は取り外し、児童の手の届く書架にのみ日本十進分類法に従って本を配置し直した。特設コーナーは新刊だけにし、その他には、季節や各学年の学習内容に合わせて特設コーナーを設けるのみにした。また、図書委員会の児童に担当書架を割り当て、本の整理のほか、図書室に来た子に手に取って欲しい本を顔見せ展示させたり、ポップを作って紹介させたりすることで、図書室内のどの書架も、児童にとって興味をもてるものになるよう工夫した。
- ② 購入図書の選定は、業者が選んだ展示図書の中から購入するのではなく、教科等の学習に必要な図書を教員に推薦してもらい、現在の蔵書の状況と必要性を考慮しながら優先的に購入した。また、児童が図書室に来室したくなるよう、現在人気が高く話題になっている図書や、児童を取り巻く社会的な課題に対応する図書などを意図的に選定した。新刊コーナーに置くことで児童が興味をもつ

1 主題設定の理由

本校は、GIGA スクール構想以前から一人一台タブレット端末や無線 LAN 環境が整備され、学校生活での ICT 機器の活用が日常的に行われている。その反面、図書室を利用する児童が少ない傾向にあり、学級での読書活動では、本に興味をもてず、何を手に取ったらよいか分からない児童も少なくない。また、コロナ禍以前は、地域の読み聞かせの会や保護者のボランティアによる読み聞かせを定期的に行っていたが、近年では実施が難しくなったため、本との関りが薄れているという課題もある。そこで、本校の強みである ICT 機器を効果的に活用して、図書委員会の児童が本の楽しさや魅力を発信していく活動を計画し、学校図書館の読書活動を活性化させるために実践を行った。

2 研究概要

図書委員会の児童による ICT を活用した読書推進活動

① 読み聞かせ動画の作成

対面での読み聞かせの実施が難しいため、図書委員会による読み聞かせ動画を作成した。一人1冊読むことで8冊分の動画ができた。タブレット端末のロイロノート（資料箱）に入れておくことで、各学級で視聴できるようにした。また、図書室に読み聞かせ絵本コーナーを設置した。

② 読書月間での活動

児童が図書に興味をもてるように「下小ミッケ！」を企画した。小学館から出版されている視覚探索絵本「ミッケ！」をもとに、図書委員の児童がタブレット端末を活用してオリジナルのミッケの動画を作成した。「〇〇の秋」とテーマを設定して、二人一組で休み時間を中心に取り組み、作成した動画を教師のタブレットで集約した。全部で4テーマのミッケ動画が作成され、毎週月曜日に各学級で動画視聴をした。また、ミッケの写真等は図書室入り口に掲示した。さらに、テーマに沿ったおすすめの本を学校図書館支援員に選書してもらい、ミッケの動画と一緒に紹介して図書室に展示した。毎週、テーマごとにミッケとおすすめ本が変わるため、校内のみ閲覧ができる図書委員会のホームページ(グーグルサイト)を開設した。タブレット端末でQRコードを読み込むと、バックナンバーが見られるようにした。

図書委員会

下小ミッケ！「食欲の秋」



テーマ「食欲の秋」

よういはいかい？
さあ ミッケ！

からまったペラノドン
にんじんを持っているうさぎ
カボチャに乗っているインコ
スプーンに乗っているミニトマト
木に生えているきのこ
きみどりのなす二つ
うすいピンクのカボチャ
きのこにつかまるトリケラトプス
みどり色のかぼす



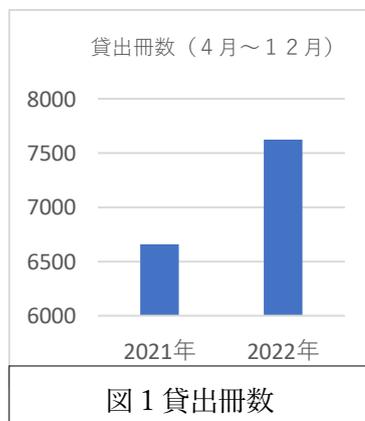
③ 下小絵本大賞の実施

全国学校図書館協議会による日本絵本大賞最終候補絵本の30冊の中から、児童に読んで欲しい8冊を選び、その中から気に入った一冊に投票する活動を行った。絵本の紹介は、図書委員がタブレット端末を活用してブックトーク動画と絵本ポップを作成した。動画は各学級で視聴して、絵本ポップは図書掲示板と図書委員ホームページに掲載した。今回のホームページの編集は、図書委員に任せて児童の主体性を高めた。児童の投票は、図書委員ホームページ内のグーグルフォームにて実施し、QRコードをタブレット端末で読み込むことで簡単に投票できるようにした。その際、投票した理由をコメントとして募集し、寄せられたコメントを図書掲示板の絵本ポップに掲載した。図書室では、投票対象の絵本コーナーを設置し、貸出にはせずに、児童がいつでも手に取って読めるようにした。



3 成果と課題、反省点等

成果としては、下小ミッケや下小絵本大賞の実施により児童の図書への興味が高まり昨年度よりも図書室の貸出冊数が大幅に増えた。(図1) また、低学年において自分で選書できなかった児童が、ミッケやおすすめの本をきっかけとして、読みたい本を進んで選書できるようになった。さらに、ミッケの絵本を囲って、何かを見つけるために児童同士が言葉の意味について楽しそうに対話をする様子が見られた。絵本を媒介としてコミュニケーションの場ができ、低学年児童の能動的・協働的な学びを支える活動になったと考える。図書委員の動画や絵本ポップの作成では、休み時間にタブレット端末を片手に持ち、児童同士が主体的に話し合っ



4 まとめ

今回の読書推進活動を通して、児童の読書への興味関心が高まってきている。来年度は、図書室の読書スペースを整備して拡大する予定である。今後も児童の読書習慣を支えていくためにも、図書室支援員と学級担任と連携して更なる実践を行っていきたい。

能動的・協動的な学びを支える学校図書館

～本の楽しさを伝え合う児童主体の活動による実践報告～

東吾妻町立太田小学校 唐沢 忍

1 主題設定

本校では、図書室を利用しやすいように分類や見出しプレートを充実させ、読みたい本に出会えるように取り組んできた。図書委員会による貸し出し活動の他に、担任に協力してもらい、児童が読みたい本を学級でも直ぐに読めるように図書コーナーを設けてもらっている。毎朝 10 分間の朝読書にも取り組み、読書への習慣は定着してきているが、図書室の利用状況や図書カードに書かれているデータを見ると個人差がある。また、本を選ぶのに苦労している児童の姿も見られる。そこで、児童が自分で読んだ本を人に伝えることにより、1冊の本を通して学び合い、また一緒に楽しむ時間をお互いに経験して欲しいと考え本主題を設定した。



2 研究の概要

(1) 図書委員会による「おすすめの本」を伝える活動

●最初の取り組みとして、図書委員会が中心になり、自分で読んだ本の中で友だちにも読んで欲しい本をどのように伝えるか話し合いの中で考えた。

①おすすめの本の選び方

低中高用におすすめの本が紹介できるように担当を決める。

②担当になった学年用に、今まで読んだ本の中から選び、他の委員と同じになっていないか確認する。

③おすすめの本を写真に撮る。

④本の題名・著者名・分類番号と書架の場所・おすすめの理由などを紹介シートに記入する。

⑤感染対策のため meet で全校児童に 4 年生から 6 年生の図書委員がおすすめの本を紹介する。

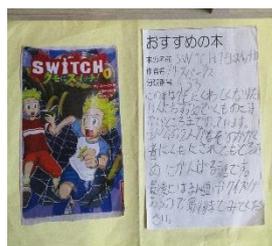
⑥おすすめの本を meet で紹介した後に「おすすめコーナー」に配置したり、図書室の黒板に紹介シートを掲示したりして興味を持ってもらえるようにする。

⑦一番多く本を借りたクラスとクラスで一番多く本を借りた児童に読書賞で表彰する。



図書委員のおすすめの本

- ・あいうえおべんとう
- ・お菓子なカードを作りました！
- ・5年生 10分で読める伝記
- ・時計がない！・ココロ屋
- ・かいけつゾロリ ・ともだちや



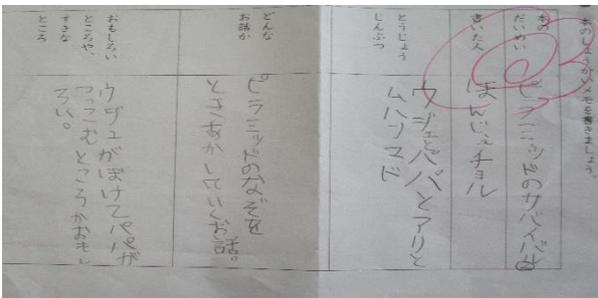
(2) 全校児童による「月別におすすめする本」を伝える活動

- 担任にも協力してもらい、全校児童に呼びかける取り組みをした。
- ①各クラスで、個々におすすめの本を紹介して欲しいことを伝える。
- ②記入するカードを図書委員から配ってもらい、期間を決めて回収してもらう。
- ③回収したカードを図書室の入り口にある掲示板に貼る。



(3) 国語の時間に伝える活動

- 授業の中で取り組んだ実践を紹介する。
- ①担任に授業の中で取り組んだ実践を紹介して欲しいことを伝え協力してもらう。
- ②国語の時間に児童が取り組んだことを全校児童にも紹介できるように、プリントや写真などを図書室の黒板に掲示して紹介する。



2年生 本は友だちの学習

「お気に入りの本をしょうかいしよう」

これまで読んだ本を振り返り、紹介したい本を選んでプリントに記入して発表した。



4年生 本は友達の学習

「読んだ本をしょうかい合おう」

読みたい本を選び、読んだ本のよさを紹介する方法を考え発表した。

(3) 成果と課題

図書委員会の話し合いで「本をたくさん借りて欲しい。」「いろいろな本を借りて欲しい。」という意見が出され、児童が主体となりこの取り組みをスタートすることができた。図書委員会からのお知らせを聞いた児童が「この本を読みたい。」と興味・関心を持って図書室に来てくれ、紹介した図書委員に本についての質問をし、学び合う場面がみられた。課題としては、読みたかった本が貸し出し中だったため次に借りようとしたが、借りている児童が直ぐに把握できず、対応に時間がかかってしまった。

(4) まとめ

1冊の本を通して学び合い、また一緒に楽しむ時間をお互いに経験するための活動を取り組みことにより、多くの本の中から自らが選んで、どうしてその本を友だちに読んで欲しいのかを考え、シートやカードにまとめ、情報を友だちに伝える活動ができた。図書委員会から発信し、全校で活動に取り組めたので、今後も続けていきたい。読みたかった本が貸し出し中で、直ぐに借りられない課題があったので改善できるようにし、今後も本の楽しさを伝えられるよう取り組んでいきたい。

「能動的・協働的な学びを支える学校図書館」

－委員会活動の活性化と学校図書館の利用－

みなかみ町立月夜野北小学校 堤 南歩

1 主題設定の理由

本校は全校児童33名という小規模校である。司書教諭はいないが、歴代の図書主任の尽力で学校図書館の本の整理はよくできている。また、県立図書館からも毎年400冊の図書をお借りして新しい本に触れる機会も多い。少人数だからこそできる実践を図書委員会の児童を中心に行っている。児童主体の良い実践を継続していくことが、児童が多くの図書に触れたり、読書を深めたりするのに有効であると考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

① 図書委員会集会

まず、学期の始めに何冊本を読むか全校児童に読書目標を設定してもらい、学期終盤の朝行事で図書委員会集会を行う。

集会は、次のような内容である。

- ・各学年の読書数の発表（一人当たりの冊数も合わせて発表）
- ・各学年のトップ賞の表彰と感想発表
- ・読書目標達成者の表彰と代表の人の感想発表

児童の感想発表では、次のようなことが発表された。「隙間時間に読書をします」「夜寝る前に読書の時間を作っています」「来年は高学年になるので高学年の本のコーナーの物も読んでみたいです」「学校が5時間の日は、長めの本を借りています」

学校図書館の利用促進につながっている活動である。

図書委員会集会は
図書室で行います。



② ふれあい読書週間

全校児童を8グループに分けて、お互いにおすすめの本を読み合い、1ヶ月後のふれあい読書集会でお互いの感想を交流する。読書の幅を広げたり、深めたりすることや、1年生から6年生までが読書を通してさらに仲を深めていくことを目的としている。



グループ同士で
感想を交流している
様子

グループで感想交
流を行っている様子

進め方は以下の通りである。

- ・班のメンバーを知る。
- ・しおりを作る。(誰が選んだ本か分かりやすくするために、選んだ本に名前を書いたしおりを挟んで回す)
- ・おすすめの本を1冊選ぶ。
- ・選んだ本を1週間で読み、ミニ感想文を書く。
- ・1週間経ったら、次の人に本を渡し、前の人から回ってきた本を読みミニ感想文を書く。
- ・班(3~4名)の人全員の本を読み、ミニ感想文を書く。
- ・ふれあい読書集会で感想を交流する。(その時の司会は、高学年児童)
- ・班ごとに、良かった感想文とその感想文を選んだ理由を発表し、班同士の交流を行う。
- ・代表者がふれあい読書週間の感想を発表する。

ふれあい読書集会は、朝行事から1校時の時間を通して行った。グループを教室毎に分け、落ち着いた中で感想交流すると共に、リモートで各教室をつなぎ、班同士の交流も行った。

それぞれのおすすめの本を紹介し、感想を共有することができ、同じ本を読んでも心に残る場面が違っていたり、普段はなかなか手にとらない本を読むことができたりと、全校で読書に親しむことができる取組である。

③ 読み聞かせ

朝行事で、月に1回「月夜野お話の会」の方が来校して読み聞かせを行ってくれる。現在は、コロナ禍なので対面しての読み聞かせではなく、本をスキャンし、リモートでの読み聞かせを行っている。実際の本にも触れられるよう、読み聞かせした本を学校図書館で借りられるようになっている。また、年1回ではあるが、図書委員による読み聞かせも実施している。どの教室も静かに読み聞かせを行っていて、児童が楽しみにしている様子が伝わってくる。

④ おすすめの本の紹介

図書委員会が中心となり、おすすめの本の紹介を呼びかけ、学校図書館の入り口付近に掲示している。



3 成果と課題、反省点等

○小規模校ならではの異学年交流の読書活動が行われているので、今後も工夫、改善を図りながら継続していきたい。

△学校全体では、良く読書をしているが、個人差は大きい。自分の読みたい本をなかなか選ぶことができない児童もいる。どの子にも読書の楽しさを味わわせてあげられるような取組を考えていきたい。

4 まとめ

児童主体の様々な実践を通して読書への関心は高い。今後も児童の実態に合った取組に改善しながら継続して実践し、より、読書に親しむことができる児童を育てていきたい。また、家庭との連携を図りながら高学年児童への読書の推進を図っていきたい。

(能動的・協働的な学びを支える学校図書館)

—自発的な学習支援活動を支援する学校図書館の運営—

佐波郡玉村町立芝根小学校 青木 洋子

1 主題設定の理由

本校では、タブレットの導入や児童を取り巻く生活環境などから、読書習慣がなかなか身に付かないという課題がある。また、児童たちの読書傾向にも偏りがあり、活字が中心の本を嫌う傾向や、絵本や漫画が書かれた本からなかなか離れられないという実態から語彙力の不足につながっている。語彙は、全ての教科における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。その語彙を豊かにすることは、学習面だけにとどまらず、生活を豊かにする大切なものと考え。そこで、児童にいろいろな場面で本に触れさせるようにすることで、心を豊かにしたり、たくさんの言葉に触れることにより児童が自ら言語能力を高められるようにと考え、図書館の運営に力を入れ取り組むこととした。

2 研究の概要

〈いろいろな本を読もう！～読書週間の取り組み～〉

児童ができるだけいろいろな分野の本に触れることで視野を広げたり、楽しみながら読書に親しむことを進めたいと考え読書週間を設け、「スタンプカード」を作成し取り組んだ。例えば「戦争に関する物語を読もう」と国語の教科書で紹介されているがなかなか読むことは難しいと感じる。そこで、各学年の先生から学習に関連した内容の本や児童に読んで欲しい本のジャンル等を聞き、その項目を取り入れたスタンプカードを図書委員会を中心に作成した。そして、全ての項目がスタンプで埋まると塗り絵のできるしおりのプレゼントがもらえるというおまけをつけ、より楽しく読書に親しめるようにした。



〈いろいろな教科の調べ学習に本を活用しよう！～本のよさ再発見～〉

タブレットの導入により、調べ学習ではインターネットを活用し調べることが多くなっている。しかし、専門過ぎるなど児童にとって理解できない内容が書かれていたり、読めない漢字や英語等も書かれていることが多くある。そこで、調べる内容に関する本を集めて「〇〇コーナー」を配置し、本で調べることのよさを感じてもらおうよう取り組みを行った。



〈学習に関連した本を読んでみよう！～くすのき文庫～〉

各学年の学習に関係した本を各クラスに配付する活動を図書委員会を中心に行った。どんな本がいいか図書整理員の方に選んでもらった





り、学年に要望を聞いたりして配付した。朝自習や雨の日の休み時間などに、ちょっとした時に読んだり、児童の目に自然に触れるように配置し、すぐに手に取って読むことができるようにした。そのことで、学習内容に対して児童の興味がさらにわき、感心が高まることを期待し設置した。

〈新聞を読んでもみよう！～くすのき文庫～〉

いろいろな情報の詰まった新聞を読む機会をつくるため、図書室にある「小学生新聞」の新聞を、一定期間が過ぎると3～6年の各クラスに配布するようになった。その新聞の切り抜きを使って、自学に取り組んだ学年もあった。



〈読書感想画に挑戦しよう！～図工と連携して～〉

読書感想画の作品募集に各学年で取り組むことを年間指導計画に位置付けて行なった。児童が好きな本を選ぶ学年や読み聞かせを行う学年もあった。絵に表すことで本の内容を深く理解したり、細かい表現に気を付けたりしながら、自分の思いを絵で表現する取り組みを行った。



3 成果と課題、反省点等

本年度は、読書習慣を身に付けさせることや本に親しむことで学力を向上させていくことの助けとなるよういろいろな活動を行った。

まず、読書習慣については、学校生活アンケート「進んで読書をしていますか」の読書に関する結果では、6月と12月を比べるとわずかながら上げてはいるが低い値のままであった。また、児童の読書傾向を見ると、読書週間の時のようにいろいろな本を読むということが続いている子はあまり見かけられない。自分の好みの本を読むのは当然であると思うが、時には「違うジャンルの本も読んでもみよう。」ということ思い出してもらえるような工夫が必要だったと感じた。そして、特に高学年には、長編物にもじっくり読んで欲しいと感じた。また、いろいろな教科との関連を考え、児童を本に触れさせる機会を設けたことで、興味関心は高まり学習への意欲が感じられる場面があったように思う。例えば、3年生の総合学習「お米について調べよう」の体験学習の場面では、自ら本を手に取り、「どのように育てていくのかな？」「このあとどう生長していくのかな？」など自分の疑問を解決し、友達同士で話している姿が見られた。また、あらかじめ学習に生かせるような「〇〇てコーナー」として設置しておいたことで、調べ学習や発展学習にも活用することが推進できたと感じた。また、たくさんの教員の手を借り協力しながら図書館教育に取り組めたことも大きな成果であった。

4 まとめ

これからも「本を読むことの楽しさ」を感じることができよう図書館教育に努め、自ら本に親しむことができる児童を育てていきたいと考える。そして、児童が心豊かに成長し、また確かな学力を身に付けられる支援、そして各教員のニーズにこたえられるような図書館運営を行っていきたい。

能動的・協働的な学びを支える学校図書館
～学校図書館の運営や読書活動の活性化

大泉町立西小学校
福島 五月

1 主題設定の理由

本校は、クラスごとに、週一時間授業で図書室を使う時間を設けている。休み時間はコロナ禍のため、ローテーションを組み、密にならないようにし、各学年週2回ほど借りに来ることができる。低学年はほぼ毎時間来室して、貸し借りをしていく一方で、高学年は、教科担当制をしているため、授業で利用するクラスは少ない。低学年と高学年で差があることは明らかである。また、休み時間の利用は、来室する児童が学年問わず、限られてきている。

そこで、低学年だけでなく、高学年にも足を運んでもらえるようなイベントの工夫や、図書委員会の機能を活用していくことで、児童の読書活動が活性化できるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 学校図書館の取組

① 図書事務職員と図書主任の連携

- ・連絡ノートの活用をし、情報交換を密にした。
- ・月一委員会の日に、読み聞かせやブックトークをしてもらった。

② 図書だより

- ・今年度は、新刊の紹介、図書委員おすすめの本、貸し出しランキングなどを載せた図書だよりを毎月発行した。

③ 町の図書館

- ・町の公立図書館と連携をし、授業で使う本を大量に貸し出してもらった。

④ 読書月間

- ・よみんご、先生たちのおすすめの本掲示、読書郵便を主に行った。



(2) 図書委員会の活動

① しおり作り

- ・150冊以上借りた児童へプレゼントした。



②おすすめの本の紹介

- ・ 4月 1年生へのおすすめ
- ・ 7月 夏休みにおすすめ
- ・ 12月 冬休みにおすすめ

よみんごシート

3-6年生用 「読みんご」

年 組 氏 名 _____

1分類	2分類	3分類
	5分類	4分類
4分類	9分類	5分類
	2分類	3分類
6分類	7分類	8分類

本の分類とは・本の内容別に10分類に分けたものこと。各分類のシマの数字。
※あいているところは自由です。
※ルールは裏面にあります。初めに読みましょう。

③おび作り

- ・ おすすめの本に帯を書いて貼った。

④新刊入荷のお知らせ

- ・ 新刊が入るたびにお昼の時間を使って、放送で周知した。

⑤意気込み、当番

・ 図書委員のやる気を高めるために、年度初めに意気込みを書かせた紙を図書室内に貼りだした。また、自分の当番を忘れないよう顔写真を撮り、これもカウンター近くに貼っておいた。ネームタグ(図書委員会の紙を入れて)を首からかけ、図書委員であることのアピールをした。



写真入りの当番表



年度初めの意気込み



図書委員手書きのしおり

⑥掲示物

- ・ 図書委員の児童が自主的に、掲示物を書いたり作ったりしていた。
- ・ 月ごとにあった本の集積を行い、季節を感じられるようにした。

3 成果と課題

【成果】

図書委員会の児童が、自分で考え主体的に仕事をするようになり、来室した児童に対して本の場所を教えられるようになってきた。読書月間によみんごを行ったことで、児童が分類番号の知識を得るいい機会となっていた。またいろいろな本に触れることができていた。分類番号を見て、書架に戻す努力をしている児童も見かけられた。

【課題】

読書月間のようなイベントが行われているときの来室者数は増えていたが、校庭での外遊びを好む児童はイベントをやっても参加する意欲があまりないと感じた。貸し出し冊数も個人差が大きい。

4 まとめ

普段から図書室に本を借りにくる読書が好きな児童だけではなく、もっと多くの児童に図書室に足を運んでもらえるように継続していきたい。